

学びは常に玉川の丘に用意されています。
通信教育部で学んだ先輩を中心に、現在の仕事や地域での活躍をインタビューします。

生涯学へ第6回 新人発掘も担う私設美術館



捧実穂

雪梁舎美術館学芸員

99年通信教育部で学芸員資格取得

2001

毎年8月に開催される「フィレンツェ賞展」。授賞式の後には入賞した作家たちと館内の喫茶室で懇親会を開き、親睦を深めてきた



2004

第6回フィレンツェ賞展で審査の進行役を務める。当日は京都国立近代美術館館長、元横浜美術館館長などを招き、厳選な審査が行われた



雪梁舎美術館は私の父が私財を投じた個人の美術館で、一九九四年にここ新潟市で開館しました。父は新潟県にゆかりのある作家の作品を残したいという思いから、良寛の書をはじめ、鍔金家で人間国宝の佐々木象堂、日本画家の横山操などの名品を集めており、さらに棟方志功の版画ほか、海外ではヨーロッパ最古の窯マイセンの磁器やシャガールの版画作品を収蔵しています。白壁に瓦葺きの日本建築も父の趣向で、館内は天井高く太い梁をわたした趣ある空間になっています。「雪梁舎」の由来を聞けば、「雪」は純粹で、天から贈られた花びらのように美しく、時に妥協のない厳しさを秘めるもの。「梁」はふるさと

の家を思わせ、母のぬくもりと父のたくましい力強さをもっている。そして、「舎」は人々が集い、励まし合い、競い合う試練の場所でもあると。郷里の雪国にそんな場をつくりたいという願いが込められています。もともと家業は祖父の代に米屋を商い、父がホームセンターを創業したことで全国へ店舗も広がりました。長女の私は後継ぎとして育ち、東京の大学へ進学し、二年間働いた後に郷里へ戻りました。自社のホームページでしばらく勤め、二七歳で結婚。再び三年間は東京で暮らし、インターネットの勉強をしたり、ビジネススクールで会社経営を学びましたが、いずれも父の事業を手伝うためでした。

その後、この美術館がオープンしたとき、私は子育ての真っ最中。長女が四歳、息子が二歳と手がかかる頃だったので、週二日ほど通って経理などを見るくらいでした。美術を学んだことはなく、最初はさほど関心があるわけでもなかったのです。それでも運営に携わるうちに、もっと美術のことを知りたいと思うようになりまし。常駐の学芸員は一人いたけれど、自分も資格を取ろうと開館の翌年、一九九五年に玉川の通信教育部へ入学。子どもが幼稚園へ行っている間などに勉強し、三年半かかって卒業。やっと資格を取れたときは、ホッとしましたね。学芸員になったことで、展覧会の企画を立てることも面白くなりまし

2008

雪梁舎設立15周年記念の企画として、東京芸術大学学長の宮田亮平氏と娘の琴さんによる親子展「海と森のやすらぎ」を開催した



た。初めて自分で企画したのは、昭和の時代に活躍した県人洋画家の作品展。私の役割は父が集めてきたものを守り、後世に伝えること。より所蔵品を大事にするという使命感も生まれました。

さらに力を入れているのが、「雪梁舎フィレンツェ賞展」です。日本の美術を担う若い作家を発掘し、その成長を支援することを目的として、一九九九年に創設。毎年、全国から約三〇〇点ほど応募があります。これも父がイタリアへ行った際、芸術の都フィレンツェを訪れ、こ

父が始めたものを受け継ぎ、広めて後世に伝えていく。それが学芸員となった私の役割だと思っています。

な街で若い人たちが勉強したら、どんなに刺激を受け、その後の画業に役立つだろうと考えたことから始まったもの。大賞受賞者には、一〇〇日間のフィレンツェでの制作活動を支援しています。

今年、東日本大震災の影響を心配しましたが、四〇都道府県から二〇三点の応募がありました。入賞作品では、生命の力強さや再生を表現したものが目立ち、震災復興特別賞に

はずむ楽しさもあります。

歴代の受賞者は、他の公募展でも入賞したり、個展で発表するなど、めざましい活躍をしています。フィレンツェ賞で上位入賞した人たちが集まって、「風の会」もできました。定期的にメンバーで展覧会を開き、元フィレンツェ美術アカデミアの教授を招いて研修会を行っています。作家どうしで交流が続いていくのも貴重なことですね。

今は若い人たちが対象とする賞や作品展示の場もだんだん減っていくなか、「がんばってますね」とよく言われます。でも、続ける意義は大きく、父が築いてきたものを次の世代につなげていくために、私も「がんばらなくては！」と思うのです。

2011



フィレンツェ賞展の審査員である元フィレンツェ美術アカデミア教授のピアンキ先生を囲んで、第4回「風の会」の研修会が開かれた

雪梁舎美術館とフィレンツェ賞展

約1,500坪の日本庭園内に建てられ、マイセン、シャガールの部屋、86畳敷きの常設展示室ほか、天井高く梁のわたる展示室では年8回の企画展がある。

若い精鋭作家の発掘を目的とした「雪梁舎フィレンツェ賞展」の応募資格は、50歳以下の具象系（経歴、所属は問わない）。毎年6月に公募され、入選作の展覧会は8月に開催。「大賞」1点には渡航費・滞在費などのほか100日間のフィレンツェ市での制作活動を支援、「優秀賞」2点は70万円、「ピアンキ賞」1点にも30日間のフィレンツェ市での制作活動を支援している。

新潟県新潟市西区山田451 ☎ (025) 377-1888
<http://www.komeri.bit.or.jp/setsuryosha/index.html>

